

大蔵研修よもやま話

吉田 秀樹

4月7日から7月15日まで、東京の大蔵研修所で会計事務職員研修を受けてきた。終わってみると短い、実際は毎日カレンダーを黒く塗り潰しては、残り日数を数え、なかなか減らないことに溜め息をついてい

た。

この研修には各省、都道府県、会計検査院等から約150名程の人が参加し、その半数が研修所の寮に入った。私もその中の1人で、部屋は文部省、厚生省の人と一緒にあった。2人とも私より年が上で、最初は話すことが遠慮であったが、お互いの職場のことなど話しているうちに気心が知れ、すぐに打ち解けることが出来た。しかし、このような部屋は珍しいほうで、他の部屋ではかなりもめごとがあったようである。

研修内容は午前、午後各1科目3時間ずつで、前期60日間は財政法、会計法の基本法と簿記が主となり、後期40日間は物管法、計算証明、給与法等、実務に即したものであった。最初のうちは緊張していたせいかあまり時間の感覚もなかったが、慣れてくると講義3時間はいかにも長く、たびたび眠気がさすし、加えて財政法の講義などでは反復ばかりでいささか飽きてしまい、ノートもとらず講義が終わったら何をしようかなどと考えることもあった。

講義が終わると最初のうちは都内の見学と称してあちこち電車、地下鉄に乗っては門限の10時頃まで遊び（パチンコが主だが）、帰ってくると同じ部屋の人と話し眠るのが日課であった。そのうち、後樂園球場が近いのでよく巨人戦を観戦したり、農林水産省、北海道、あるいは寮の集りというように懇親会が週に1回開かれるようになった。また、東京にいる学生時代の友達と連絡をとっては夜のネオン街で会うこともたびたびで、研修旅費だけでは当然足りずかなりの持ち出しになった。そんな状態も40日位たって前期の試験が発表され、遊んでばかりはいられなくなった。

試験は3日間で、多い時は1日8科目、少ない時で4科目なので一夜づけは到底無理な話であった。やはり毎日の講義の復習を少しずつしておけばよかったが、40日も経った今はすでに遅すぎた。毎日夜中の2時ごろまで、遅い時で3時から4時頃までノート整理に血眼になった。毎日復習していた人たちはゆうゆうとしていたが、私と同じような人達は大変で、だんだん試験

が近くなってくると、お互い話もせず、へたに話をしようものなら喧嘩ごしの陰悪な雰囲気になることもしばしばであった。次第に寝不足から神経も苛立ち、講義も全然耳に入らない状態で、夜は布団の中に入っても明け方になるまで寝られないなど、一種のノイローゼ気味になってしまった。他の人も同じで、やがて勉強をしなくても机に向っていなければならない苛立ちとなり感情的な言動が目立った。試験前一週間位がそんな状態のピークで、試験の前の日などはかえって、諦めか自信か、和やかな雰囲気であった。

あれ程の苦しみで迎えた試験の3日間は簡単に過ぎた。但し、それからがまた大変。思うように点の取れなかった者は、試験前とは違ったノイローゼ状態となり、そういう人に気を使わなければならなかった。私も十分に出来たわけではなかったが、同じ部屋の1人がそんな状態になってしまうと、雰囲気が重苦しくなり、出来るだけ試験の話はしないようにした。

残り40日間は、前期の反省から、講義が終わると2時間程の復習を続ける方針に切り換え（あまり守られなかったが）、とにかく机に向かうことにした。初めのうちは苦しくて、つい話をして時間を過してしまうのであったが……。慣れてくると実行はそれ程苦にならなかった。しかし、夜眠れないのは相変わらずで眠る努力をする方がかえって苦しかった。

そのような状態の、ある夜中のことである。この話は同じ部屋の人にも全く信用してもらえなかったことなのだが……。

以前に研修の成績が悪いことを苦に首つり自殺した人がいたそうである。その部屋は私の部屋の同じ並びにある103号室で、今は使われていなかった。寮生達はその部屋に幽霊が出ると噂していた。夜中の2時半頃寝つかれずトイレに立った。部屋の戸をあけて、廊下に出ると目の前に影が延びてきているので誰かいるなと思いそちらに目をやると、103号室の前に誰かが立っている。その人影は全然動かない。何秒間位見ていたろうか。噂をまさかと思っていた私も、背中にツーンと寒気が走り、一瞬出たと思った。すぐに寝床に引き返し部屋の1人を起した。イヤイヤ起きた彼にその話をすると、笑って全然信用してくれない。とにかく廊下を見てくれと頼むと、あくびをしながら廊下に出たが、すぐに引きかえして誰もいないとすぐに寝ようとした。もう一度ムリヤリ引張って廊下へ出て見ると本当に誰もいない。もうその話は打ち切ることにした。でも私は確かに見たのである。あるいは、本当の人間だったかもしれないが……。とにかく、その日から夜中に1人でトイレに行

かないことにした。

やがて研修も残り少なくなり、後期の試験日程が発表された。今度はそれほど必死になることはなかった。ある程度復習もしていたし、実務に即した計算証明、給与法等が主なものであったせいでもある。寮にいる人達の大半もそうらしく、前期の試験の時はほとんどわれわれの部屋を訪ねる人はなかったが、夜中に見回りなどと言って酒などを持ち、あちこちから遊びに来ることがあった。そして職場に戻ったあともお互いに連絡をとろうとか、中には帰ったらすぐに会おうなどと、もう帰ってからの話に花を咲かせていた。札幌出身は私を含めて5人程いた。

後期の試験がまたたく間に過ぎて、明日で最後という夜などは、本当にこれが最後だとトイレで会っても自然に笑いが出て来るほどだった。試験が終わって部屋に帰って来た時は、しばらく気が抜けたような状態になってしまった。研修も終わってみると長い間の苦しさもウソのように思え、むしろ、一生のうちでただ一度だけしか味わえない研修が終わったんだと思うとかえって寂しささえ感じた。次第に研修にきた喜びを感じずると同時にあと3日で家に帰れる嬉しさ、もうなんともいえない気持ちになった。お金はなくとも伸びのびとした2日間を過し、最後の夜は寮生全部が一カ所に集って騒ぐにいいだけ騒いだ。今まではこれだけ騒ぐと管理人のおばさんが注意しにくるのだが、この晩だけはそんなことはなかった。名残りをおしみながら自然解散となったが、朝まで飲んでる人もいたようだ。

終了式では終了証書の授与に続いて成績上位者の発表で、上位3人はいずれも大蔵省の人たちだった。自分はどの辺にいるのか解らなかったが、知らない方がよいのかもしれない。終了式も終わり100日間お世話になった寮を出て本省に挨拶を済ませ、同じ札幌の人たちと待ち合わせた羽田に向った。ところが千歳空港が霧のため欠航ということになった。やっと帰えれると思ったのに。その晩は皆で安い旅館に泊り、次の朝早く東京をあとにした。

長かった100日間、苦しいこともあった、楽しいことも少しはあった、この研修は自分にとって貴重な体験だったと思う。自分以上に一生懸命に勉強をしていた人たちがほとんどだが、その人たちはもっと充実した気持ちになっていることだろう。自分でさえそう思っているのだから……。

(十勝支場)